

🔑 【開拓記念碑や延命茶など】

『グリーンタウン通信』の読者ならどなたもご承知のように、グリーンタウンのいいところは、近くにドライブに出かけたり、散策する風光明媚な場所がいくらかもあることだ。ちょっとクルマを走らせ見晴らしの良い山野を散歩したり、近くのお蕎麦屋さんで蕎麦や天ぷらを味わう。秋の昼下がり、風のそよぎが見える黄金色の稲穂の海、蕎麦畑の白い花、辺りに漂う充実の気配。もちろん秋だけでなく、光眩しい初夏も、遠くの山嶺に雲が湧く盛夏も、季節ごとに満足のきわみだ。

多くの会員の方々は、そうしたドライブや散策のうちに各所に「土地改良事業記念碑」「開拓記念碑」などと記された大きな石碑を目にされたことだろう。仁之倉の小林農園の近く、同じく仁之倉の長野方向に向かう農道では畑の真ん中に似たような碑銘が記された巨石の記念碑が建っている。また県境を越えて妙高山麓に向かえば池の平の手前にも、そしてトマトで有名な大洞原など各所に似たような石碑がある。



「土地改良事業」とは、「農業生産基盤の整備及び農村の保全と管理」を行う事業で、灌漑そのほかにも含まれる、などと役所の文書にはあり、今でも各地で行われているようだ。しかし、そもそもの始まりは、いわゆる戦後開拓だ。「戦後開拓」は、小生は知らなかったが、日本の農業政策の歴史で重要な概念らしく、**Wikipedia** にもアップされている。簡単に言えば、外地からの帰還者や東京などで焼け出された人々に帰農してもらい、それまで開拓されていなかった荒地を豊かな農地に変え、戦後の厳しい食糧事情の改善に寄与してもらおうという国家の政策の言い換えだった。

思い出されるのは、20年以上前の1999年、美山郷に別荘を建てた秋、美味しい野菜が買えるという噂を聞いて、仁之倉の、今は小林農園の店のあるところに「観光農園」という名の店があり、出かけた時のことだ。十一月の初めの穏やかな陽射しの中で大根の薄味の煮付けなども現場で食べられた。そのおいしかったことは今でも忘れない。だが今でも忘れられないもうひとつは、その時にお店のご主人で、すでに80歳近いとお見受けしたご老人の語ってくれたことだ。まずはとうもろこしの植え付けの話から始まって、次第に昔話になった。

あのあたりは緩やかな斜面にとうもろこしをはじめ、さまざまな野菜が植えつけられているが、その広大な地域は、元は森林と原野で、丈余の熊笹が繁っていたところだった。戦後に開拓したのはそのご老人たちだったとのこと。今のように重機もない時代、斧と鍬と鎌がすべてで、それはそれは大変な作業だったと、日に焼けた顔を秋の陽に輝かせながらぼつぼつとお話ししてくださった。だが、もっと忘れられないのは、その先だ。その方はもともと長野県の別の地方の出身で、満蒙開拓で派遣されていた大陸で終戦を迎え、昭和21年の冬、ボロを纏っただけの状態で、引き揚げ船で直江津港に着いたとのこと。そしてそのまま吹雪の中をボロ靴で歩き通して、案内されたのが黒姫山の麓の当該地区、ここを開拓して自由にやってくださいと言われ、それから必死に働いたそう。

満蒙開拓に送り出された人々の数は、長野県が全国で一番多いことは有名だ。総計27万余名のうち一位の長野県が3万8千人弱、二位の山形県が1万7千人余というから、いわばダントツだ。どうしてそうなったかは、またその過程における信濃教育会の役割などについては既に多くの文献がある¹。

主として伊那の方からのようで、下伊那郡の阿智村には、満蒙開拓平和記念館がある。創設の音頭をとり、創設時に副館長を勤められた寺沢秀文氏の思い出（インターネットで読める）²には、開拓村の様子や「五族協和」とは名ばかりの現地人への差別や略奪、終戦と共に始まる逃避行と非常に多くの犠牲（約8万人と言われている）、そして戦後の再入植の苦勞が語られている。この記念館は2013年の開館だが、三年半後の2016年11月には、まだ天皇・皇后の地位にあった現在の上皇と上皇后が訪れて、悲慘な歴史に思いをいたしてくれたことを寺沢氏は回顧の冒頭に記しておられる。

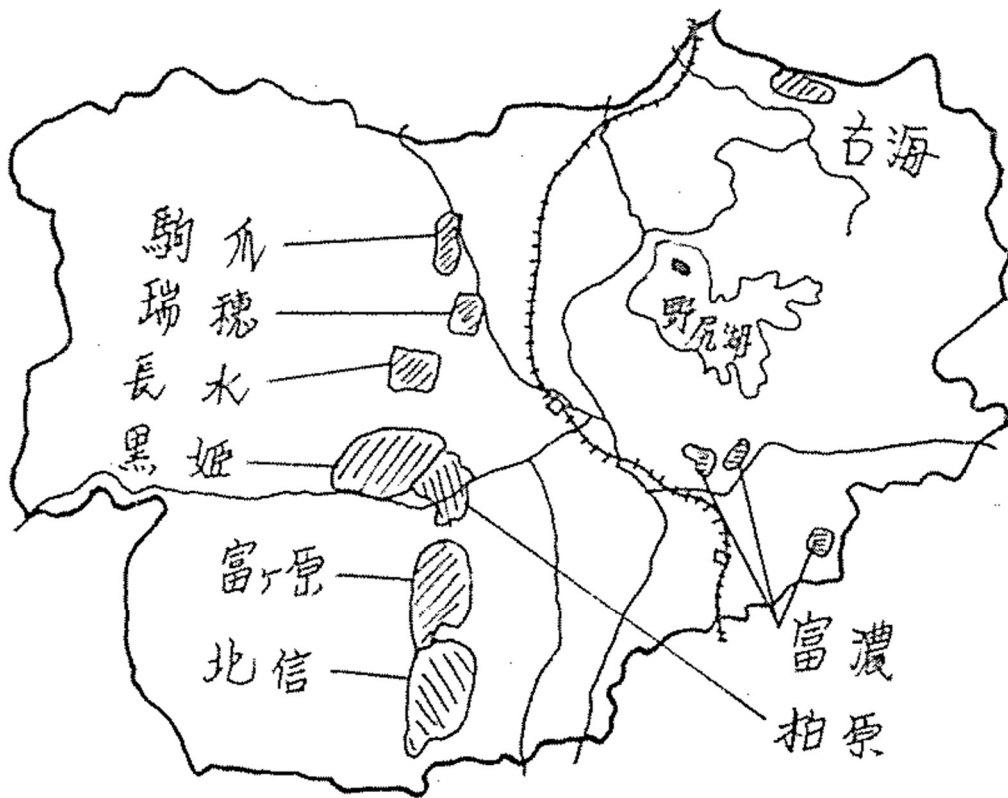
満州からようやく日本に辿り着いても、多くは次男・三男以下だったこともあって、故郷には田畑もなければ、経済崩壊の時代、働く職場もない。そこに農林省が目をつけて、引揚者を中心に食糧増産の開拓という一挙兩得に思える政策を展開したわけだ。寺沢氏の記述によれば、長野県だけで200余カ所に開拓組合ができて、多くは山麓の原野や山林に入植した。しかし、その苦勞は並大抵ではなかった。「元々手がつけられていなかった山間奥地等の劣悪な環境の開拓地が多かったため、その離農率も高く」、北海道やまた遠くブラジルへと旅立った人も多かったそう。全体としては中央官僚の作った「一挙兩得」計画の典型で、当初は

¹ 例えば小林弘忠『満州開拓団の真実』（七つ森書館）本島和人『満州移民・青少年義勇軍の研究―長野県下の国策遂行』（吉川弘文館）長野県歴史教育者協議会『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』大月書店。

² https://www.nrknet.org/pdf/h28_manmou.pdf そのほかにもネットでは開拓の証言を数多く読むことができる。

100 万戸の入植による 155 万町歩の開拓、1500 万石の収穫を見込んだ計画だったが、実際に入植したのは予定の五分の一の 21 万戸余、多くの人が途中で諦めた結果、1961 年時点で残っていたのは 9 万戸、開拓面積は予定の見込みの三分の一にも満たない 44 万町歩程度に過ぎなかったようだ。最後に紹介する延命茶の発明者狩野誠氏の形容によれば文字通り「棄民政策」だった。

とはいえ、がんばってそれなりに成功した人々の成果が、黒姫や妙高周辺の多くの集落だ。長野県では、昭和天皇がすでに昭和 22 年に訪問したことでも知られる軽井沢町の大日向地区が有名だが、信濃町もたいしたものだ。1968 年に出た 1300 ページを越える『信濃町誌』という大著がある（編集：信濃町誌刊行委員会。発行人：信濃町町長）。縄文時代からはじまり、各時代の産業や、政治、経済、風物に関するありとあらゆる知識を総覧した学術的価値豊かな堂々たる書籍だ。さすがは我らが信濃町。その本の最後の年表を見ると 1946 年 3 月の項に「霊仙寺山麓に開拓者入植（北信開拓、富が原開拓）」と記されている。富が原は今では牧場で有名だ。そして本文中 20 数ページにわたって下の図にあるように各地域への入植者の数とその年代の変遷、入植に伴う苦労などが詳細に記されている。要点を辿ってみよう。



開拓新村分布状況

最初の冬は「山寺を借りて共同生活を」しながら春を待っていたそうだ。本堂は火が禁止されていたそうだから、さぞ寒かったことだろう。人によっては「露天に幕を張って、五尺の積雪に耐え、冬の五カ月間をほとんど難民に近い生活を送った」とある。「家族を養うために山仕事に出て賃金もとった。闇屋、行商もした。草の芽も、木の葉も、その根も掘って食べた。石にかじりついてやる決心だった」(742。数字は『信濃町誌』のページ数)。富が原

の隣の北信地区の記述にも、板橋の釈尊寺本堂（今も釈尊寺の朽ちかけた建物は存在する）や稲村の貞林寺を借りて住み、猛吹雪の中で雪を分けながら「三十年ものの唐松の大木を伐採したり」「運び出したり、不自由な仕事道具しかなく、食料も医療も不足の中に辛苦に耐えてとにかく越冬した」(747)などとある。雪は多くの人があまくみていたようで、難儀したらしい。狩野誠氏も柏原で、雪で靴がダメになり立ち往生していたら、お婆さんが黙って地下足袋をわたしてくれたそうだ。そして問わず語りに「戦死した息子のもの」と語ってくれたとか。黒姫の仁之倉地区の開拓を回顧した長い文章には次のような記述がある。

「まず藪を刈り払い、から松などの切り株はそのまま残し、周りを一鍬、一鍬掘り起こし、草の根の土をふるい落とし、木の根、枯れ葉と共に焼却する作業が、文字通り夕に星をいただき、朝に月の影を踏みながら続けられた。そして草木の灰が散布された新しい畑にはすぐさま散種

が行われた。初年度は肥料の配給がなかったので、草木灰が唯一の肥料であった。当然のことながらその秋の収穫は惨めなものであった。ただ大根だけはみごとなものがとれたのがせめてものなぐさめであった」(754, 755)。

多くの人はお寺で雑居生活をしながら冬を越したこと、今のような重機も刈り払い機もないなかでの開墾の苦労が忍ばれる。冬の本堂の寒さは想像にあまりある。

開拓組合のうつりかわり

組合名	区 分	入植当時	合併当時	最 近	
		S. 24年 2月 1日現在	S. 31年 2月 1日現在	S. 35年 2月 1日現在	S. 41年 2月 1日現在
長水	総面積	500	560	495	495
	開拓面積	130	282	247	193
	戸数	10	10	9	9
	人口	30	36	37	33
駒爪	総面積	650	578	621	621
	開拓面積	141	296	468	261
	戸数	23	16	17	17
	人口	58	72	75	71
古海	総面積	—	175	132	132
	開拓面積	—	75	38	64
	戸数	—	5	4	4
	人口	—	12	16	17
瑞穂	総面積	675	825	1,145	1,145
	開拓面積	83	387	427	307
	戸数	15	15	15	15
	人口	49	61	69	74
黒姫	総面積	1,160	1,323	1,280	1,280
	開拓面積	250	687	711	578
	戸数	29	21	20	20
	人口	84	90	87	73
富が原	総面積	1,626	2,166	2,040	2,040
	開拓面積	583	946	1,074	790
	戸数	62	57	54	50
	人口	152	205	206	181
北信	総面積	1,720	1,428	1,140	1,140
	開拓面積	540	625	613	630
	戸数	45	42	44	42
	人口	194	176	161	178
富濃	総面積	—	280	322	322
	開拓面積	—	190	290	230
	戸数	—	14	14	13
	人口	—	69	64	51
柏原	総面積	850	600	668	668
	開拓面積	151	360	306	311
	戸数	17	15	15	15
	人口	61	66	59	64
合計	総面積	7,181	7,935	7,840	7,843
	開拓面積	1,878	3,844	4,174	3,456
	戸数	201	195	192	185
	人口	628	787	774	742

そうした中で興味深いのは、先にちょっと触れたが、延命茶で知られる黒姫和漢薬研究所の創設者狩野誠氏の回顧談だ。インターネットでも一部読めるが³、『開拓農民』という表題の回顧録を平凡社で武者小路実篤の序文つきで出版されている。文学的才能にも恵まれていたようだ。こんなに凄い本には滅多にお目にかからない。

氏は特攻基地の知覧で終戦を迎え、東京の深川に戻ってみたが、生まれ育った家は焼けて跡形もなかった。仕方なく、たまたまみた黒姫開拓の広告を見て応募したそう。黒姫」という地名が魅力的だったのと、日本がゼロからやり直すには金儲けよりも農業からという信念だったそう。昭和 22 年に入植した。山から木を切り出して作った掘立小屋には隙間から雪が降り込み、朝起きると「布団の上に五寸ぐらい積もっていた」そう (32。数字は氏の自伝のページ数)。家族を養うために長野駅周辺で易者もしたそう。働きづめの茫々髭とボロの着物が易者らしく見えてうまくいったとか。そしてあの地域は学校からも遠いので雪が積もると登校できない。「ほとんどが大陸生まれ」で朝鮮のお菓子や満洲の夕陽を懐かしがっていた(84)子供たちのために「桃太郎学校」という名の闇の分教場を作った話面白いが、農業だけでは食べていけないことを悟って、笹寿司に使う笹の葉の殺菌作用に目をつけて、他の草も合わせて今の延命茶を作った研究熱心にも心打たれる。できた延命茶を赤倉ホテルにはじまり、あちこちの店に置いてもらうべくセールスに回ったが、多くは「こんなマグサみたいなもの売れますかね」とニべもなくあしらわれ、帰りに奥さんと背中に背負った大量の延命茶を川に捨てたこともあったとか。だが、いいものはやがて認められる。そのうち日



立製作所の本社からも大量の注文が入り、丸ビルにまで届けにいったとか。

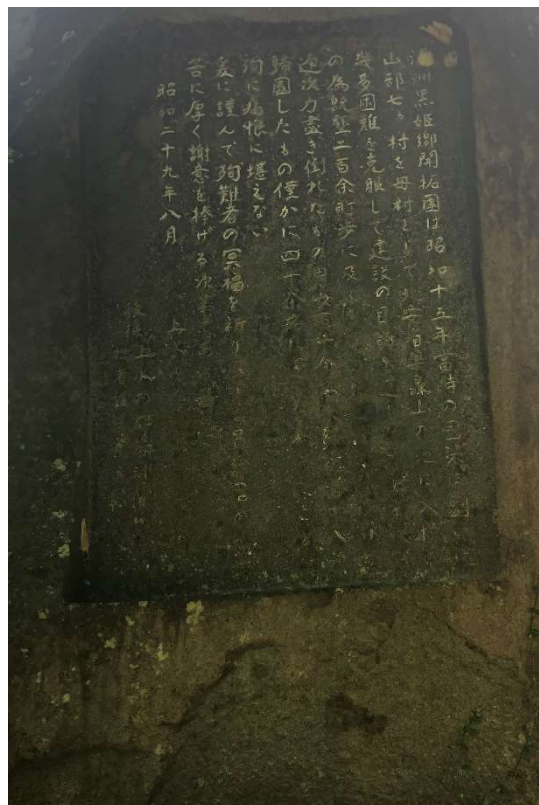
そうやってしだいに地元でも成功者になっていったが、片時も忘れなかったのは、無謀な戦争と、特攻機に乗って死んでいった仲間だったとか。第二次大戦への痛恨の思い、また満蒙開拓団の悲劇への想いは、多くの当事者に共通しているようだ。柏原の小林一茶の菩提寺近くにある小丸山公園には、開拓の碑ではないが、満洲に派遣された人々への痛恨の思いが彫られた石碑が立っている (写真参照)。

また長野県各地の開拓民の代表者が国の「棄民政策」に抗議すべく、県庁に集まった時もまずは、「敗戦によって斃れた幾百万の同胞たちへ黙祷を捧げた」(161)。その上で、開拓資金の政府による返済取り立て、払えない者からは江戸時代の年貢と同じに収穫したわずかな米や麦を持っていってしまう、あまりに

³ <https://www.kwk-kurohime.com/sanroku/sanroku01>

もひどい政府に抗議をする、特に「効果のあがらない開拓などやめてしまえ」(162)と国会で叫んだ農林大臣を皆で糾弾したそうだ。この農林大臣の名は河野一郎、現在の河野太郎デジタル担当大臣のおじいさん。

黒姫山から妙高山の山麓に展開する実り豊かな稲田を、そして青空の下で風に揺れる蕎麦の白い花を楽しむ際には、また見るからに効きそうな延命茶を飲むときには、原野を切り開いて今の美しい景色を作った戦後開拓の人々のことを考え、満蒙に派遣された人々の運命を思い、さらには阿智村の記念館の文章にあるように、大陸の人々にもたらした苦しみに思いを馳せるきっかけとして、こうした開拓の碑や土地改良記念碑はあるのだろう。



小丸山公園の碑の裏面

碑の裏面の文

満州黒姫郷開拓団は昭和十五年 当時の国策に副い北山部七ヶ村を母村として 北安省薬泉山の地に入植し 幾多困難を克服して建設の目的を達したが 不幸敗戦の為 既墾二百余町に及ぶ豊沃の地を捨て 引き揚げ途次力尽き斃れたもの 男女百十余名 未帰還者十八名 帰国したもの僅かに四十余名に過ぎなかったことは 洵に痛恨に堪えない 茲に謹んで殉難者の冥福を祈り奉り 団員諸君の労苦に厚く謝意を捧げるものである
昭和二十九年八月 上水内郡北山部七ヶ村